

鹿児島大学医学部保健学科公開講座実施報告：「リハビリテーションを目指したケア“最期までその人らしく”を支える」

著者	丹羽 さよ子
雑誌名	鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報
巻	11
ページ	33-36
別言語のタイトル	Rehabilitation Nursing for Supporting the Patient's Personhood
URL	http://hdl.handle.net/10232/24346

「リハビリテーションを目指したケア“最期までその人らしく”を支える」

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻 丹羽さよ子

1. はじめに

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻では平成20年度から看護職を対象とした公開講座「リハビリテーションを目指したケア“最期までその人らしく”を支える」を開催

している。

リハビリテーションとは、「機能回復訓練」を連想される方が多いと思うが、本来「全人間的復権」という意味であり、最期まで「ありたい自分」「なりたい自分」を目指

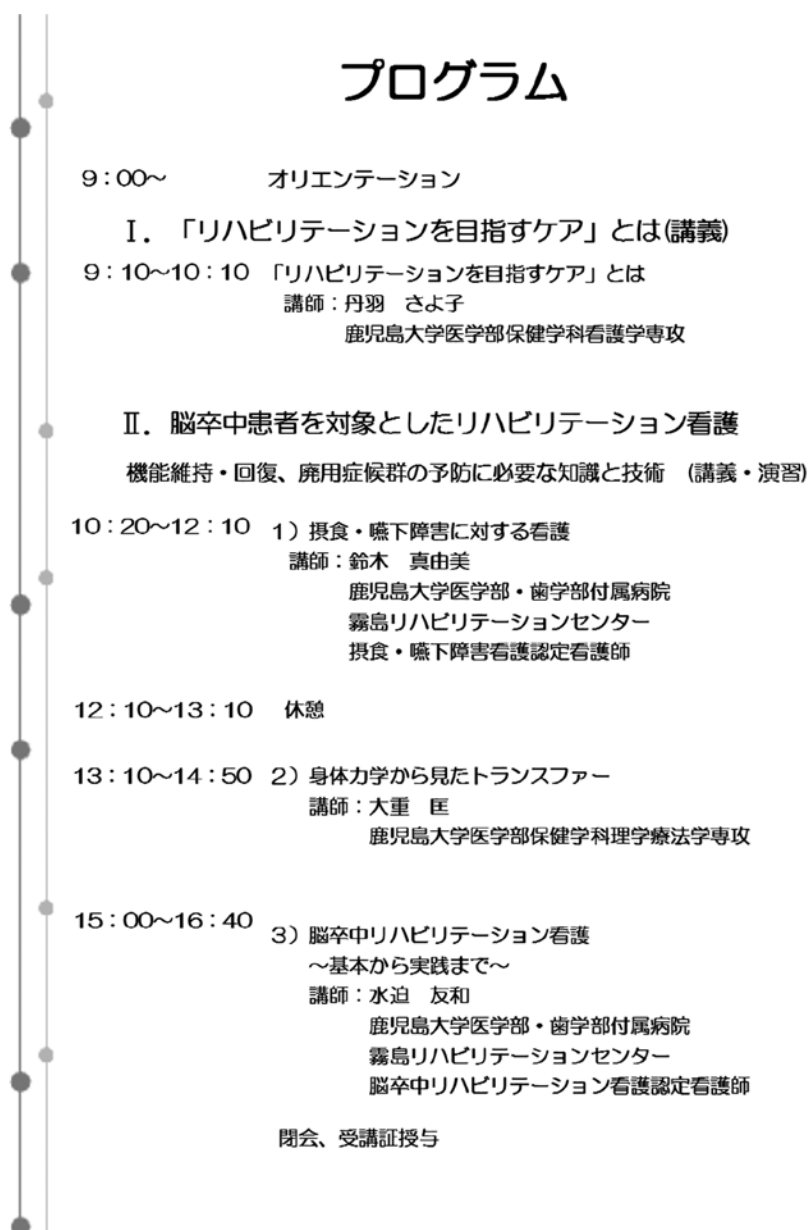


表1 平成26年度公開講座プログラム

して前向きに生きてもらうための取組といえる。私たちは、公開講座のテーマのように、最期までその人らしく生きることを支えたいという強い思いから、本公開講座を開催している。

表1に今年度のプログラムを示し、各講義・演習について概説する。

2. 「リハビリテーションを目指したケアとは何か」(講師 丹羽さよ子)

リハビリテーションを目指したケアについて基本的な話をしている。本講義の主旨は下記のようになる。

- ①「リハビリテーション」とは「全人的復権」を目指した取り組みであり、リハビリテーションを目指したケアとは、最期までその人らしい生活・人生が送れるように支えるものである。
- ②対象をひとりの人間として尊重できるか、その人らしい生活・人生を思い描くことが出来るかどうかケアの質を左右する。



- ③看護師は、生活行動の援助を通してリハビリテーション(全人的復権)を目指す。ここでの「生活行動」とは、呼吸・循環などの生命維持に不可欠な生理機能、食・排泄・清潔・睡眠・運動などの基本的な日常生活行動、さらに、人間関係・学習・遊び・仕事・趣味活動・信仰などより社会的な行動までを含んでいる。
- ④身体的側面への働きかけだけではなく、障害受容など心理・社会的側面へのアプローチも看護師の大切な役割である。
- ⑤医師、理学療法士や作業療法士などの他職種と連携・協働することがリハビリテーションのより大きな効果をもたらすことになる。

- ⑥看護職としての倫理的感受性を高め、ケアの対象(患者)の人権と個別性を尊重した看護を提供しましょう。

次に、脳卒中後遺症の人をケアの対象とした場合に必要な知識と技術について講義・演習を行っている。テーマとしては、「摂食・嚥下障害に対する看護」「身体力学から見たトランスファー」「脳卒中リハビリテーション看護～基本から実践まで～」の3つである。

3. 「摂食・嚥下障害に対する看護」

講師は、鹿児島大学医学部・歯学部附属病院霧島リハビリテーションセンター所属の摂食・嚥下障害の看護分野で熟練した看護技術と知識を有することを認められた、認定看護師である鈴木真由美さんである。講義・演習の内容をまとめると、下記のようになる。

- ①摂食・嚥下障害に対するリハビリテーションにおける看護師の役割
- ②嚥下と誤嚥のメカニズム
- ③ベッドサイドで看護師ができる嚥下機能のアセスメント
- ④摂食・嚥下障害患者へのアプローチ
食事介助時の注意点、ケアの技術
- ⑤誤嚥・窒息に対するリスク管理



4. 「身体力学から見たトランスファー」

講師は、鹿児島大学医学部保健学科理学療法専攻の大重匡准教授である。大重匡氏は理学療法士であり、リハビリテーションに関する専門職である。講義・演習内容は、ケアの対象(患者)を寝たきりにしないために、出来る限り自立性を維持・向上させるためにはどのような介助をし

たらよいかについてである。いつも、受講生全員が楽しく演習している。



5. 「脳卒中リハビリテーション看護 ～基本から実践まで～」

講師は、鹿児島大学医学部・歯学部附属病院霧島リハビリテーションセンター所属の脳卒中リハビリテーション看護分野で熟練した看護技術と知識を有することを認められた、認定看護師である水迫友和氏である。脳卒中についての基礎的な知識だけではなく、日常のケアでのポイントやコツについて話をしていただいた。講義・演習の内容をまとめると、下記ようになる。

- ①リハビリテーション看護の重要性
- ②脳卒中はどんな病気
- ③脳卒中の合併症について
- ④脳卒中の看護
 - ・ 廃用症候群予防と看護
 - ・ 高次脳機能障害とリハビリテーション看護
 - ・ 片麻痺患者の看護技術

6. 今年度の本公開講座に対する受講生のアンケート結果

受講生は27名であり、アンケート回収率は93%（25名）であった。本講義・演習に対する受講後の感想としては、ほぼ全員が満足という回答をしている。受講動機と本公開講座の活用についての記述回答は以下の通りである。

1) 受講動機について

- ・ 病棟の業務の中で、リハビリの技術の習得と、今後の看護業務に生かしたいと思った。

- ・ 回復期リハビリ病棟の勤務に活用できると思った。
- ・ 脳外科病棟勤務なので、知識を身につけたい。
- ・ 将来的に摂食・嚥下看護認定看護師を希望予定としているので。
- ・ リハビリ看護について認識を深めたいと思った。
- ・ 師長などにすすめられて。
- ・ 離床に対して、学習したいと思った。
- ・ 入院～生活をする上でのリハビリテーションであり、その人にあった…という方法を伝えていくうえで、どのように伝えることで、生活という視点に立った介入を学習し、指導に生かすかという指導者としての学び、伝達という方法を学びたかった。
- ・ 体調を崩し、腰痛持ちでもあり、力を入れずによりよい移動ができるようになれば、患者さんにも自分自身にもよい方向につながればと思い参加した。
- ・ その人らしくというテーマに興味があった。
- ・ 仕事で麻痺の患者をみるが多くなったため、役立てたいと思った。
- ・ 急性期から始まるリハビリテーションについて考えている中で、リハビリテーションを通じて行えるケアを勉強したいと思いました。
- ・ 患者の移乗に不安があり、知りたかった。
- ・ 昨年の公開講座に参加したスタッフが良い講座だからと受講をすすめてくれた。
- ・ セラピストにまかせっきりになっているので、看護師の役割を知るため。
- ・ リハビリ看護（概論のみ）の講義を担当することになって2年目です。自分の経験では説明できない内容（臨床現場、新しい考え方等）を学習したくて参加しました。
- ・ リハビリについて勉強してみたい。
- ・ 復習を兼ねて。
- ・ 精神科看護を通して、患者さんが高齢化しており、今後の看護に少しでも生かすことができたらと思い参加した。
- ・ 自分は看護しているのかなと疑問をもつようになり、参加した。
- ・ 高齢社会の為、人間が最期までその人なりの生活がしていけるよう、援助していければと思った。

2) 本公開講座を今後どのように活かしていけるか

- ・ 日々のベッドサイドケアに活かせる。日常生活援助については、後輩や介護士に対して教育に活用していけると思う。

- ・基礎を再度振り返ることができた。
- ・リハビリの連携を十分図りたい。
- ・移動技術という面、ケアの根拠を伝えていくことで、リハビリの一員として生活者としての視点から学んだことを生かしたい。
- ・実技を交えてすぐに使っていける。
- ・嚙下障害や移乗動作などに役立てたい。
- ・正しい方法を学び自信につながったので活用したい。
- ・リハビリで疲れているからと臥床をさせていますが、今後多くかかわっていきたいと思う。

7. 終わりに

近年、高齢化や医療技術の進歩により障害をもちながら生活をする人々が増加しており、私たちにとって「より良く生きて、より良く死ぬ」ことは重大なテーマである。このテーマに少しでも寄与できるように、今後とも本公開講座を継続していきたいと考えている。